

一、はじめに

このシリーズを書き始めて五回目になります。海蔵地区という狭い地域にスポットをあて、地域の歴史を探ることは、史料等の不足を感じさせられます。しかし、地名には史実の谷間を埋めてくれるものが多々あります。このシリーズでその谷間を埋めるよう努力してきたのですが、実際にはなかなか思うようには参りません。

さて今回は、海蔵地区の最も「海蔵」たる「阿倉川」について考えてみました。もちろん「阿倉川」は、東・西両阿倉川について検討し、ここでは出来るだけ東西を省略したいと思います。

二、阿倉川の地名

第一回目の中で「海蔵川」は「阿倉川」であると断言しました。その根拠として「海」を「阿」と発言させることにあったかと思えます。

さて、海蔵地区には、古くから「阿倉川」の用字として以下のものがあります。

- ① 「鞍久良川」
 - ② 「阿久良川」
 - ③ 「鮑久良川」
 - ④ 「安久良川」
- これらの字が用いられる以



三、江戸期になって

前は、海蔵川は「海人蔵川」でありました。海人蔵を海蔵にしたのは、奈良時代に地名を二字で表わす風習がつくりだされたためでしょうか。この海蔵を音で表わすことから①～④のような字が用いられたのでしよう。それぞれ①～④の字が用いられた時代がいつごろなのか実証できれば、海蔵地区の歴史がもっともと浮き出されるのですが、残念ながら明らかではありません。

江戸初期までは、東西阿倉川は「阿倉川村」を形成していましたが、十七世紀になって東西に分離したと伝えられるものの、確かな証拠に欠けております。また、江戸初期以前の阿倉川村に関する記録も極めて少ない、領主の変遷も不明な点が多い状況です。



江戸期になって、桑名藩、天領、紀州領と東西阿倉川村領主が変遷しますが、その傍

海蔵地区の地名を調べて

その五

四日市市史編さんP・T

森 逸 郎

鎌倉時代の書物「神風抄」

には、「鮑良河御厨」が出てきます。この記録が「阿倉川」の一番古い記録になるのでしょうか。

証にも欠け、正確な領主の判明は、享保年間（十八世紀初頭）以後にまで下ります。

享保十一年、八代將軍吉宗の御側用人であった加納久通は一万石の大名として取り立てられ、東西阿倉川を下賜されている。この折に、東阿倉川に陣屋をおいたが、後には文政九年に陣屋を上総国（今の千葉県）一の宮に移したため、一の宮藩、八田藩あるいは加納藩とも呼ばれています。加納藩の支配は、明治四年の

廃藩置県まで続きました。

この間、羽津村との間には志根ヶ野境界争いなどがあり、寛延年間の裁許状は、四日市市指定文化財ともなっており

石に対して馬一ないし三疋、人足も同数であった。東阿倉川村は馬三十疋ほど準備せねばならないほどであったから、年貢を納めること以上に大変な労苦を強いられたものと考えられます。

四、消えゆく民俗芸能

東阿倉川村は、桑名郡太夫村（現桑名市太夫町）とならぶ大（代）神樂の伝統芸能が所在した土地であります。

江戸時代中ごろから盛んであった阿倉川代神樂は、明治になって桑名郡太夫村大神樂との間に争いを生じたりしたが、その後も各地を巡って、世に阿倉川の代神樂として名を知らしめてきた。つい最近その芸能保持者の最後の方が他界され、あとを受け継ぐ気運も見られません。

また、阿倉川は、修験者山伏の地でもありながら、今ではすっかり忘れ去られた格好になっております。

五、終りに

私達の周辺には、何げなしに語りつがれてきた事柄が、この二十年ほどの間に急激に忘れられ、語られようともしなくなりまして。大変さみしい思いが致します。

今、市内の他地域では、そ

れら昔の出来ごとの掘り起しが盛んになってきております。海蔵地区の方々も取り組まれてはいかげでしょうか。是非そうされることを念願して、このシリーズを終えることと致します。



編集後記

TVゲームは、恐しい程の勢いで各家庭へ浸透しています。

一過性のもので、半年か一年も経てば下火になるという見方や、いや数年は続くだろうという説があり、専門家の間でも意見の分れるところです。いずれにせよ、今、その功罪を本腰を入れて考える時期にきています。この紙面が、その一助になれば幸いです。

広報編集委員会